

蘇芳集

八月も

青山

丈

でで虫を机の上で忘れけり
涼しくて川の向かうに人が居る
蝉時雨中に一本道があり
八月の簾半分巻いてある
八月も曲るところは曲りけり
家に居て家で昼寝をしてをりぬ
白桃の一つ容に剥いてみる

峡の空

下平直子

滝しぶき見えて明るき峡の空
匂ひくる山気や峡の夕焼けて
滝川に遊びし手足夜も冷ゆる
風熄んで夜も弛みなき滝の音
滝音を枕に浅き旅寝かな
明易し峡を貫く川の光り
旅果の滝の湿りの服を干す

豆ごはん

富田正吉

お互ひの親の話や豆ごはん
草踏めば水滲みだす菖蒲園
前へ行くものは時間と揚羽のみ
紫陽花を見て大勢の人となる
渾身の力をもつて浮いてこい
三社祭揚げまんぢゆうに並びけり
まあまあの雨となりたる太宰の忌

藪蚊過ぐ

野路 斉子

吹かれては

前田 陶代子

静けさは泰山木の花の森
想ふこと泰山木の咲けば散り
蝉時雨風の小枝を指揮棒に
当然の事とし窓に鳴く蝉も
蝉が好き何も思はず鳴く蝉が
後悔のしきりシートで汗を拭き
痛がつてゐる傍らを藪蚊過ぐ

齒 触り

別 府

優

短 夜

松 原
ふみ子

硬い物噛んでゐる間の梅雨入かな
六月の時刻むかに砂利を踏む
父の日の街に漂ふごとく居る
太宰忌の白シャツに糊利いてゐる
夏至の日の土鳩が傍を通りけり
齒触りでみる辣菫の漬け具合
短夜の夢のつづきの独り言

蛇苺横須賀線のまた通る
雨意深し咲くより零れ沙羅の花
切株の年輪しかと閑古鳥
叡山の風吹き下ろす夏料理
藻の花や舟着場とふ板二枚
曳き交す舳の水尾も夏始
短夜や停泊船に灯の溢れ

枇 杷

峰岸 よし子

夜も水の匂ひの中の濃あぢさる
忌の母へ告ぐあぢさるのけふの色
枇杷に色来たりしよりの雨つづき
青鷺の向きを変へたる遠目かな
あめんぼう跳んで水輪をあらたにす
夕焼が水より醒めてゆく時間
自画像の未完のままに梅雨の月

夜 振 火

宮尾 直美

夜振火の美しからむ旅の果
鮎宿の遠き水音なほ遠き
梅雨寒の人乗せて去る救急車
野良猫のゆくへ芒種の雨しとど
南風や額の一つはゴツホの黄
万緑の中碑の月日かな
暮れてなほひかりの中に山法師

非 番 の 日

八木下 末黒

孟宗のみどり揺れゐるころもがへ
狛犬の彫りよき毛並み夏つばめ
よく動く金魚の尾ひれ非番の日
いちじくの大きく熟す暮し向き
薪棚にシート掛けある夏館
くちなしの極みの白さ明日知れぬ
歳月や白きあぢさる遠目にす

蛍 沢

吉田 幸敏

目が覚めて白夜ルツコラサラダかな
蛭蓆すこし動くは母が来る
手話の指立てればゆらと水中花
蛇苺出会ひ頭を名乗りけり
径それて昼の蛍とすれちがふ
ネクタイを外してよりの蛍沢
蛍合戦火の玉水に落ちて消ゆ

白さうび

小川 美知子

鳩濡らし雀を濡らし五月雨
夏鴨の中から動く一羽かな
警官が自転車停める立葵
竹煮草降り出したかと止んだかと
立ち上がるとき姫女苑揺らしけり
来た道を日暮は帰る忘れ草
先生が最後に座る白さうび

ゆくへゆくへに

木内 憲子

青インク半分ほどになつて夏
炎昼の都電あらはれては曲る
遠く過ぐるものは涼しきまひるかな
雲涼しゆくへゆくへに木立置き
日盛りの鏡中に時逆転す
滝落つる昔と同じやうにかな
滝音に捉はれてゐるひとりかな

人のこゑ

清水 裕子

薄雲のあれど夏空美しき
噴水にひととき混じる人のこゑ
父想ふ泰山木は花を得て
銅鑼打たるごとく泰山木咲けり
薔薇の香やなべて木椅子は二人掛
人に蹴くことにも馴れて薔薇を見に
薔薇の香に躓いてより池に沿ふ

